平成２９年度事業 外部評価結果報告書

東京都写真美術館外部評価委員会

平成３０年7月３１日

目　　次

1　座長あいさつ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

2　総　評　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

3　評点一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

4　評価結果一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

座長あいさつ

このたび、東京都写真美術館外部評価委員会は、平成２９年度の東京都写真美術館の運営に対する評価結果を、伊東信一郎館長に提出しました。

東京都写真美術館は、平成２８年９月にリニューアル・オープンし、今回は、リニューアル後、初めてとなる１年間を通じての活動について、評価を行いました。

評価にあたり、「作品収集、作品管理、調査研究」では、館の収集方針に沿って効果的な収集が行われ、作品管理が的確に行われたこと、「展覧会」では、収蔵展・自主企画展ともに豊富なコレクションを活かし、質の高い展覧会を数多く開催していること、「教育普及」では、各年齢層に多様なプログラムが提供されていることなどに着目しました。また、広報・宣伝では、報道機関への働きかけや、きめ細かな広報が行われていることにも注目しました。美術館の活動を財政面から支える「支援会員」では、過去最高額を獲得し、自主財源として有効に活用した点を高く評価しました。

一方、ホームページの見やすさの工夫やインターネット等を用いた情報発信のさらなる充実、さらには、オリンピックに向けての安全対策、職員の健康管理や労働環境の改善など、これまで以上に取組を進めていただきたい課題もあります。

今後も東京都写真美術館が、世界に向けて優れた写真・映像文化を発信し続けるとともに、地域の「顔」としての美術館となるよう、リニューアル後の新たな美術館の活動に、私たちも大きな期待を寄せているところです。

当委員会では、今回の評価が東京都写真美術館の今後の事業運営の改善、発展の一助となるよう各委員から寄せられた提言、課題等に着実、迅速に取り組まれるよう望むものです。

平成３０年7月３１日

東京都写真美術館外部評価委員会

座長　　柏　木　　博

【総評】

平成２９年度の美術館運営について、「優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集」では、新指針および第二期重点作家の選定も適切である。指針に沿って重点作家から若手中堅作家まで、幅広く、質の高い作品が厳選され、寄贈も含めて効果的に収集されている。国内作家への偏重は改善されている。

「的確な作品管理」では、改修工事後の保存環境整備が問題なく進められている。また、被災した文化財への初期対応や支援など社会的意義が大きい活動が行われたほか、保存・修復技術の普及や研究成果の共有に広く貢献している。

「調査・研究」では、展覧会図録の論文、メディアへの寄稿、学会発表、講演会・シンポジウムへの参加など、各学芸員が様々な事業に積極的に参加し、学術的成果を公開しており、展覧会図録の論考にも充実が見られる。

「展覧会」では、収蔵展、企画展ともに、調査研究の成果に基づいた多彩で多様な事業を行い、質・内容と観覧者数の双方で大きな成果を上げた。平成をテーマとして３期にわたり紹介する収蔵展や、海外作家の展覧会も魅力的である。

第１０回目を迎えた「恵比寿映像祭」は、充実した見応えのある企画であり、「インヴィジブル」という困難なテーマをあえて選び「映像が映し出す不可視性」を掘り下げようとした点を評価したい。「映画」についても当館ならではのラインナップを揃え上映している。

「普及教育活動」では、展覧会に合わせた講演会やギャラリートーク、小中高校・大学と連携した暗室での制作体験や鑑賞など、多彩かつ数多くのプログラムを展開しており、質・量ともに充実している。

「図書室事業」では、ホームページからでも蔵書検索ができ、研究者等の利用に役立っている。継続的な図書の収集・保存も適切になされている。

「広報・宣伝」では、報道機関との日常的なネットワークを構築しており、戦略的な広報戦略が行われている。従来型の広報はきめ細かく行われ、恵比寿ガーデンプレイスとの連携、正月開館のイベントなどでリピーターの獲得に務めている。

「インターネット等を用いた情報発信」では、ホームページの多言語化や、都心の便利な立地を生かした外国人向けの広報を強化したことを評価する。インスタグラムの導入など新たな取組も見られるが、さらに魅力的な情報伝達方法については改善・工夫の余地がある。

「来館者サービス」の面では、ミュージアムショップでの幅広い商品展開などにより、美術館を訪れる動機が喚起されている。視覚障害者との鑑賞ワークショップなどを実施したほか、週末の夜間開館など利用しやすい環境づくりに努めている。

「企業・団体等の参加促進」については、支援会員制度を定着させ、自主財源を

展覧会開催のために有効活用している。２９年度は積極的な募集活動により、支援会費が過去最高額に達した。

「ボランティアの参画促進」では、教育・普及活動を支えるボランティアの地道な活動が継続的に展開できている。研修も充実しており、新たに鑑賞プログラムの会話の場を促進するなど新しい展開が期待できる。

「地域との連携強化」では、「あ・ら・かるちゃー文化施設連絡協議会」を中心に地域での文化活動を継続展開している。企業などとの連携にも期待したい。

「インフラ」面では、リニューアルを経て鑑賞環境が向上し、エントランスホールなどが明るい雰囲気となっている。

総じて写真美術館においては、現状では展覧会を中心として、少ない人員で数多くの充実した事業を実施している。しかし、年間の展覧会本数は多すぎ、学芸員を中心とするスタッフの過剰負担と健康管理が懸念される。また、年々増えていく収蔵作品は大型化したものが多く、将来を見据えた計画的な外部収蔵庫のあり方を検討することを願う。写真美術館職員の英知を結集し、今後も来館者の知的好奇心を刺激するすばらしい事業を展開していくことに期待する。

平成29年度事業　評点表

評価項目		評点
1 作品収集・保存事業の評価　＜過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館＞		5
(1)	優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集	5
(2)	的確な作品管理	5
(3)	写真・映像に関する幅広い調査・研究	4
2 事業展開の評価　＜質の高い写真・映像文化と出会う美術館＞		5
(1)	来館者数の目標達成と集客増	5
(2)	質的な満足を得られる展覧会の提供	5
(3)	恵比寿映像祭	4
(4)	良質な映画の誘致と上映	4
3 教育・普及事業の評価　＜写真・映像文化の普及と新たな創造を支援する美術館＞		5
(1)	対象者に応じた多様なプログラムの提供	5
(2)	図書・情報の収集と公開の促進	4
4 広報事業・情報発信の評価　＜写真・映像文化の拠点として貢献する美術館＞		4
(1)	効果的な広報・宣伝	4
(2)	インターネット等を用いた情報発信の推進	4
5 来館者の視点、企業・団体の参加、ボランティア事業、地域連携の評価　＜開かれた美術館＞		5
(1)	良質なサービスの企画、提供	4
(2)	企業・団体の参加促進	5
(3)	ボランティアの参画推進	5
(4)	地域との連携強化	4
6 インフラの改善　＜ミッション達成のための必要な基盤の整備＞		4

※評点区分：【高】5　【やや高】4　【中】3　【やや低】2　【低】1

平成２９年度事業評価結果一覧

１　作品収集・保存事業の評価　【評点５】

＜過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館＞

（１）優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集　【評点５】

≪評価の理由≫
●日本の代表的写真作家について第一期重点作家 17 名を決め、各作家の作品を重点的に収集した。既に評価が定まった作家については、作品が希少、高額など困難があったと思うが、充実した収集を行い、各作家の作品を展覧会で公開した。
●重点作家から若手中堅作家まで、幅広く、質の高い作品が厳選され、作家からの寄贈などを含め、効果的に収集されている。
●新指針、及びその中の第二期重点作家の選定も適切であり、その指針に従って着実に収集を続けている。１ 人の作家について代表作を含む、ある程度まとまった数の作品を収集している。

≪指摘された課題・提言等≫
●写真の収集方針の第一項にうたわれている、「国際的な視野」に立脚した収集という観点では、いわゆる「国外」作家の作品収集について手薄の感が否めない。限られた予算内での事業であることをさし引いてもなお、改善・工夫の余地がある。

（２）的確な作品管理　【評点５】

≪評価の理由≫
●九州北部豪雨で被災した文化財への初期対応や洗浄についての支援など、社会的意義が大きい活動が行われた。また、外部からの視察を積極的に受け入れながら、さらに収蔵庫施設の解説、作品の保存方法に関する動画を制作するなど、保存・修復技術の普及や研究成果の共有に広く貢献している。
●重要文化財に指定されているものを始めとするダゲレオタイプに関する研究は、的確な作品管理の基礎を成すものとして意義あるものであり、高く評価できる。
●作品の保存に関しては本館、外部収蔵庫ともに細心の注意で管理を行っている。展示の際も資料保存の観点から照明等の最適化を図っている。

≪指摘された課題・提言等≫
●保存管理とは異なるが、収集した映像作品のうち、劣化しない DVD の映像などは、研究者向け、一般向けの公開方法を考えて欲しい。
●今後とも地道な保存・修復活動は元より、広く外部へ向けての写真の保存科学の啓蒙という、館に期待されている社会的な責務を果たし、それに伴う情報発信に努めてほしい。

（3）写真・映像に関する幅広い調査・研究　　【評点4】

≪評価の理由≫
●スタッフによる調査研究、図録や研究紀要への発表が、着実に行われている。
●各学芸員がそれぞれの専門に応じて、展覧会図録の論文、他のメディアへの寄稿、学会発表、講演会・シンポジウムへの登壇、委員・審査員の就任など、写真美術館の事業及び外部の事業にも積極的に参加し、写真専門の美術館を支える学術的成果を公開している。
●インターンに紀要への投稿機会を与えることは素晴らしいことである。
●図録の論考は毎回充実しており、特に初期写真に関するものは資料的価値も高い。19 世紀の日本の写真については従来、調査研究が十分とはいえなかったので、この分野を体系的にまとめ、継続して展示を行ってきたことは非常に重要な成果である。

≪指摘された課題・提言等≫
●現況では、各学芸員にとっての研究発表の場が、主に展覧会の構成とその図録に限られているように見受けられる。まずはそれ自体のいっそうの増補や充実に努めてほしい。さらに、紀要の充実も図られるべきであり、インターンだけでなく、学芸員も館蔵品の個別調査・研究などを執筆する場とすべき。
●昨年度と同じ印象が拭えない。図録関連の発表では、「幅広い」とは言えないことも気にかかる。また、発表に関しても、より広範なメディアでの発表が望まれる。
●紀要において、限られた予算や労力をイベントのテープ起こしと活字化に費やすことの是非については、映像・音声による最低限の記録がなされているなら、よく検討・再考すべき事案ではないか。

2　事業展開の評価　　【評点５】

＜質の高い写真・映像文化と出会う美術館＞

（１）来館者数の目標達成と集客増　　【評点５】

≪評価の理由≫
●収蔵展、自主企画展ともに、全体として目標を上回る来館者数を得ている。
●年間の来館者が３８万人超を達成しているのは評価できる。
●東京都からの委託費・補助金に加えて、東京都写真美術館独自の制度により引き続き、企業等の支援会員による自主財源を確保している。

≪指摘された課題・提言等≫
●十分に評価できる達成度だが、リニューアル前の状態を回復するため、さらなる努力が求められる。「新たな来館者」の掘り起こしは、容易なことではないが、今後も努力してもらいたい。
●誘致展では達成率 95%と、若干不満の残る結果となった。
●東京都の人口比として 38 万人という設定自体が、高い目標とはいえない点にも留意しておきたい。
●ある程度やむをえないこととはいえ、展示によって来館者数にばらつきがあった。

（2）質的な満足を得られる展覧会の提供　　【評点５】

≪評価の理由≫

●収蔵展、自主企画展は高い品質のものに取り組んでいる。長島有里枝のような中堅作家の紹介は、写真表現の発展のためにも欠くべからざるものと思われる。今後も同様な取り組みを続けてもらいたい。

●収蔵作品を活用した「TOP コレクション展」とアジェ展、「『光画』と新興写真展」など、質の高い展覧会を実施し、図録を出版した。自主企画展として重点収蔵作家である荒木経惟の企画展、インドの女性写真家ダヤニータ・シンの回顧展、中堅作家である長島有里枝展、「写真発祥地の原風景　長崎」展など、調査研究の成果に基づいた多彩で多様な展覧会事業を行い、展覧会の質・内容と観覧者数の双方において大きな成果を上げた。

●「光画」展、「写真発祥の地の原風景」展など長年の調査を背景に、よく練られた展覧会を行っている。また、海外作家の興味深い展覧会も魅力的である。

●収蔵品をふんだんに使ったコレクション展を三期にわたって開催した。これは年々数が増え充実してきている収蔵品あってこそできる展示であり、写真美術館の実力を示したものといえる。

●天皇退位に関するニュースがたびたび出ていた中で開催されたシリーズ「平成をスクロールする」収蔵展は、社会で元号とその時代への意識と興味が高まっていた時期と重なり、非常にタイムリーな企画だった。

≪指摘された課題・提言等≫

●いくつかの展観において、キャプションの壁面掲示を避け番号のみを記す傾向が散見された。そうした事例においては、審美性への荷担によって、鑑賞者の情報取得が苦役となる嫌いもあるので、鑑賞への便宜と展示空間の美観の創出をいかに調和・両立させるか、今以上に吟味検討すべきである。

●古写真の展示等における過剰な展示替は、展観そのものの同一性を毀損しかねないので、あらかじめ注意すべきである。

●本邦であまり紹介されていない現代作家の展示をもう少し増やしてもいいのではないだろうか。

●常設でなく、常に企画展で構成する美術館は、展示について非常に積極的な印象を与える。次はどんな展示をやるだろう、と期待を抱かせるような美術館であってほしい。

（3）恵比寿映像祭　　【評点４】

≪評価の理由≫
●充実したプログラムによる見応えのある企画であり、館内もすっきりと見やすいインスタレーションがなされていた。展示スペースの無料観覧、図録の無料配布も奏功し、集客を含めた事業の目的はほぼ達せられていると評価できる。
●展示、シンポジウム、ライブイベントなど複合的かつ多彩なプログラムを展開している。
●「インヴィジブル」という、映像作品にとっては困難なテーマをあえて選び、94 組の作家・ゲストにより「映像が映し出す不可視性」を掘り下げようとした意欲を評価したい。新進若手作家紹介としても機能しているし、歴史的な作品やベテラン作家の作品を再見する機会（若い観客にとっては初めて見る機会）を提供することも重要であろう。
●恵比寿周辺地域のギャラリーなどとの地域連携事業も充実しており、これも継続することを期待する。

≪指摘された課題・提言等≫
●映像祭として、世界的にいまひとつ認知度が高くないことによる。海外の映像祭の多くは、発表の機会を求める若手の作家たちによって、常にリサーチや応募の対象となっているが、そうした映像祭としての地位は現時点では確立できていない。
●欲を言えば、現時点で資料性の高い図録が、もう少し「読み物」としても魅力を備えていれば、と思う。

（4）良質な映画の誘致と上映　　【評点４】

≪評価の理由≫
●商業館では見ることのできない、まさにミュージアムを特徴づける貴重な作品をセレクションしている。
●ほかでは上映しにくい、マイナーだが興味深い映画が多数上映され、映像の専門美術館らしいセレクションであった。
●「実験劇場」の試みでは、TOP でなければ出会えない良質な作品が厳選され、商業的には上映が難しい映像作品も多い中、「ゴッホ～最後の手紙」や 6 年目を迎えた「ポーランド映画祭」での集客成功は心強い。

≪指摘された課題・提言等≫
●上映期間が短く、年間のラインナップも決まっていないようで、告知が展覧会と比べて広く及んでいないのではないかというところが残念である。SNS 等を使って直近でも機動力のある広報を心掛けてほしい。
●ホール本来の目的の一つは、館のオリジナル企画によるコレクションを中心とした上映において、研究成果を広く社会に還元することであろう。少しずつでもそのための使用が行われる必要がある。

３　教育・普及事業の評価　　【評点５】

＜写真・映像文化の普及と新たな創造を支援する美術館＞

（１）対象者に応じて多様なプログラムの提供　　【評点５】

≪評価の理由≫
●暗室体験、アニメーション、視覚装置実験、スクールプログラムなど幅広く、対象者に応じたプログラムを実施している。
●工夫を凝らした多様なプログラムが展開されている。また、「教育普及プログラムブログ」は、ツイッターでシェアされやすい構造で、実際の写真を掲載して内容をわかりやすく周知し、学びの場への関心を高めている。
●各年代の層に対するきめ細かな教育・普及事業が行われていると評価できる。
●スクールプログラムは毎回、来館する児童、生徒にたいへん好評である。暗室作業など当館の特長をいかした制作のプログラムと、鑑賞のプログラムの両方をそろえていることもすばらしい。また担当学芸員とボランティアの緊密な協力により、きめ細かく丁寧なサービスが提供できているため、参加者の満足度も高い。

≪指摘された課題・提言等≫
●今後もさらなる多様化を実現するためにも、写真美術館ならではの取り組みの開発に努めてもらいたい。
●多くの美術館にも共通する課題をしいて挙げるなら、一般の就労世代に対する普及がどの程度行われているかを十分に自問しつつ、当該の事業を進めてほしい。
●体験学習をきっかけに写真や映像に興味を持つ子供がでてくることも期待されるため、今後も力を入れてやってほしい。

（２）図書・情報の収集と公開の促進　　【評点４】

≪評価の理由≫

●写真・映像に関する専門図書館として、他の図書館にはない充実した資料、写真集、専門書の蔵書を４万６千冊以上、逐次刊行物を1786タイトル所蔵し、一般に公開している。

　また外部からの横断検索に対応するデータベースＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴやＡＬＣにも参加している。ホームページからでも蔵書検索ができ、写真研究者や写真愛好者の利用に役立っている。

●他の図書館では収蔵していない専門図書、貴重本があり、映像と写真に特化した美術館の図書室として独自性がある。毎回、写真展の内容に応じて稀覯本を含む関連図書が展示されているのも、豊富な蔵書を物語っている。

●十分とは言えないものの、上映会に合わせた写真集リストの作成など、ユニークな取り組みが見られて評価できる。

≪指摘された課題・提言等≫

●図書室は図書の収集・保存・閲覧はもとより、作家のドキュメントなど、図書と作品の中間に位置するいわば「第３の資料」の収集・保存も、重点作家を定めるなどして積極的に手がけていくことが望ましい。そうしたアーカイヴ機能の強化については、あまり充実した取り組みとして伝わってこない。

●昨年提案したリーディング・イヴェントなどに加え、写真集を題材としたディスカッションなど、さらなる工夫が望まれる。

●実施された「図書室利用者サービスに関するアンケート」の分析をして、入室者を呼び寄せる企画の実行などが期待される。

●映像（DVD）を閲覧できるコーナーを設けてもらうと、映像研究者や一般の愛好者が貴重な映像資料にアクセスすることができるだろう。

４　広報事業・情報発信の評価　　【評点４】

＜写真・映像文化の拠点として貢献する美術館＞

（１）効果的な広報・宣伝　　【評点４】

≪評価の理由≫

●「東京都写真美術館ニュース eyes（アイズ）」の発行（季刊）のほか、広報誌別冊「ｎｙａ－ｅｙｅｓ（ニャイズ）」（月刊）の発行は、紙媒体ながら無料配布により来館者にとってよい広報媒体となっている。特に「ニャイズ」はギャラリーなどでも配布されて親しまれている。

●報道機関との日常的なネットワークの構築で、新聞・雑誌でのコンスタントな記事掲出によるマス向けのほか、SNS やチラシ配布などによるターゲットを絞ったコミュニティ向けなど、戦略的な広報活動が行われている。

●年代を問わず「nya-eyes」の固定ファンも多いが、新規ファンも獲得しており、強力な広報ツールとしての役割を果たしている。

●従来型の広報については、申し分のないきめ細かい施策がとられており、それが集客につながって目標をクリアしており、評価できる。

≪指摘された課題・提言等≫

●種々の取り組みを行っているが、多岐に渡るため、どれがどのような効果を生んだのか事後の評価がしづらい。調査・研究の発表の場としてのメディアなども検討しても良いのではないか？

●作家の知名度、展示内容によって媒体への掲載数に差があることから、メディアとのさらなる親密なネットワークを広げ、少しでもメディアでの露出を増やす努力が今後も必要と感じる。

●「ＴＯＰコレクション展」３回で行ったスタンプラリーは、ある程度リピーター獲得に貢献したものと思われるので、今後もコレクション展で継続してはどうか？

（2）インターネット等を用いた情報発信の推進　　【評点4】

≪評価の理由≫

●新シンボルマーク・ロゴタイプに改訂したホームページの基本的な情報を4か国語対応にしたこと、展覧会情報を日英バイリンガルにしたことや、都心の便利な立地を生かした外国人向けの広報を強化したことが評価できる。

●ツイッターが画像や動画付きで頻繁に更新され、スマホからホームページへのアクセスが増加し、フォロワー数も順調に伸びている。また、インスタグラムでの発信、Youtube を活用した動画配信もされている。

●新進作家展の際に web コンテンツを充実させて広報したことは、想定される観覧者の年齢層などを考慮した戦略でよかったと思う。

≪指摘された課題・提言等≫

●フェイスブックでの広報を行う予定・必要性はないそうだが、ツィッターと併せて更新することもできるものだし、広報メディアとして再考してもよいのではなかろうか。

●TOP の多岐にわたる事業の素晴らしさ、TOP 自体の存在の大きさが、ウェブサイト上では伝えきれていないのではないか。

●館のホームページの工夫については、ある程度機能的で見やすい反面、写真や映像の「アート」を謳った美術館としては、あまりに素っ気なくデザイン的な野心があまり感じられない。機能的でありながらなお、デザイン的な新規性も満足させるような取り組みが望まれる。

●Facebook の公式ページがないなど、積極的に取り組んでいるという印象を持てない。サイトやページを開設すれば良いというわけではないが、再考が必要。

●今後ネットを通じた情報発信はより身近で、第一の広報手段になると考えられるので SNS などとの連携を図り、さらに充実させていってほしい。可能であれば、ギャラリートークの動画などもホームページで配信できるとよいのではないか。

●海外向けに、インバウンド需要の獲得のためだけではなく、日本の写真家、芸術家全体の地位向上のためにも、英語とビジュアルを活用し、わが国唯一の写真・映像の総合美術館として写真文化のセンター的役割を担っている実体を、ネット上のオウンド・メディアで広く丁寧に伝えることで、デジタル空間でも、中長期的な目標である「存在感のある美術館」を目指してほしい。

5　来館者の視点、企業・団体の参加、ボランティア事業、地域連携の評価

＜開かれた美術館＞　　【評点５】

（1）良質なサービスの企画・提供　　【評点４】

≪評価の理由≫
●展覧会事業、映画上映、教育普及事業ともに、観覧者の知的興味を喚起し、新しい視点や情報を提供するような、質の高い企画を提供している。
●非流通本や非西洋圏の写真集など幅広い商品展開、オリジナル・グッズなどにより、ミュージアムショップを訪れる動機が喚起されている。
●昨今のバリアフリーのトレンドに合わせ、視覚障害者との鑑賞ワークショップなどを実施している。また、週末の夜間開館など、利用しやすい環境作りに努力している。
●講演会の終了後などに作家、登壇者のサイン本などを売るためにミュージアムショップが出張販売するなど、売り上げ増収に対する努力が見られる。

≪指摘された課題・提言等≫
●カフェやショップは改修の重要なポイントだったはず。効果があるように思われるが、より地道な、アンケートなどを通して、その効果を具体的に把握する必要がある。
●比較的リピーターになりやすい若年層と高齢者層ではなく、二つの中間に位置する、そもそも美術館に来てもらいにくい就労者層にいかに関心をもってもらうかという難題についての取り組みは、今ひとつ見えてこない。

（2）企業・団体等の参加促進　　【評点５】

≪評価の理由≫
●平成 29 年度で、273 法人が参加する企業による支援会員制度を定着させ、自主財源として活用し展覧会開催のための予算を充実させている。このような多数の企業による支援会員制度と 8200 万円超の高額の会費収入は、他の美術館の追随を許さないものである。
●独自財源のさらなる充実を実現するなど、非常に積極的に取り組み、効果を上げている。

≪指摘された課題・提言等≫
●国内の美術関係組織に対し、研究会を呼びかけるなど、自身の取り組みを広く社会で共有するための試みも望まれる。
●ホームページに、外国語ページも含めて、法人スポンサーのロゴとリンクがほしい。
●現状でも理事会には日本の名だたる企業が名を連ねているが、さらに多くの企業、業種に賛同してもらえる努力が継続して必要だと考える。

（3）ボランティアの参画促進　　【評点5】

≪評価の理由≫
●ボランティアの参加・研修などを行い、活動数のべ３０７人は評価できる数字だ。
●美術館活動の中でも、教育・普及活動を下支えするボランティアの地道な活動が、継続して展開できている。
●教育普及担当の学芸員の方々は忙しい業務の中で、ボランティアが気持ちよく参加して、活動しやすい環境作りや雰囲気作りにつねに気を配って対応しており、こうした学芸員の意識がボランティアの参加促進に大きく貢献している。

≪指摘された課題・提言等≫
●研修などへの積極的な取り組みは評価できるが、依然として、資料からはNPOとの連携が見えてこない。
●新規登録者が５月のみになっているので、年間を通して応募ができると参加しやすいかも知れない。
●ボランティアは美術館サポーターとしても大変重要なので、今後もこの規模で維持できるよう、ボランティア担当者の努力を期待したい。

（4）地域との連携強化　　【評点4】

≪評価の理由≫
●エリアマップの制作、「区民広場、ふるさとフェスティバル」など多彩な活動を行っている。
●「あ・ら・かるちゃー文化施設運営協議会」の活動を通じて、イベントやマップの作成・配布などが実行されている。
●地域の文化施設との協議会の活動を積極的に推進することは、重要であり評価できる。

≪指摘された課題・提言等≫
●渋谷周辺の文化施設による「あ・ら・かるちゃー文化施設運営協議会」を平成17年より設置したというが、エリアマップによる広報宣伝やイベントの共催以外には活動はないのだろうか？
●周辺施設との連携などに積極的に取り組んでいるが、関係が常時保たれているという印象が薄い。また、施設や個人だけでなく、企業などとの連携にも期待したい。
●「あ･ら･かるちゃー」は、点から面への展開として期待されるが、現状ではまだ浸透しているとは言いがたい面もある。今後の地道な継続が必要だと考える。
●今後は、地域の文化資源を共有して活用するような、具体的な提携による事業を、より積極的に具現化することが望まれる。

６．インフラの改善　　【評点４】

＜ミッション達成のための必要な基盤の整備＞

≪評価の理由≫
●エントランスの位置がわかりやすくなった。エントランスホール、ロビー、綜合受付、カウンターなどが明るい雰囲気になっている。
●基本的には、限られた予算の中で充実した事業展開がなされている。

≪指摘された課題・提言等≫
●美術館だけの問題ではないが、周囲の施設を含めて、出入り口や導線などが把握しづらい。
●オリンピックに向けて、セキュリティー対策に万全を期し、緊張感を持ったテロ対策訓練を繰り返し行うことが望まれる。
●年間の展覧会の本数が過多であり、学芸員を中心とするスタッフの負担が大きいことが容易に想像できる。展覧会の本数を削減することで、一つの展覧会事業をより充実させ、研究体制を整えることが、将来のよりよい展覧会事業の立案・実施のサイクルを形成するために肝要である。
●東京都写真美術館は常設展ではなく、つねに企画展を開催して、貴重なコレクションの公開に努め、独自性を出しているが、いっぽうで学芸員をはじめとするスタッフの方々の負担も大きいものと推察する。健康で職務に向きあえるような労働環境を維持していってほしいと願う。

資　　料

東京都写真美術館外部評価委員会設置要綱

（設　置）

第１　東京都写真美術館（以下「美術館」という。）の事業実績を客観的に評価し、事業　効果を適正に測るとともに、改善事項の検討を進めるため、館長の私的諮問機関として東京都写真美術館外部評価委員会（以下「評価委員会」という。）を設置する。

（所掌事項）

第２　評価委員会は、次の事項について審議し館長に助言を行う。

（１）美術館が掲げる定性目標、定量目標に基づく美術館事業の外部評価報告書に関すること。

（２）その他、館長が必要と認めた事項に関すること

（構　成）

第３　評価委員会は、学識経験等を有する者の中から、館長が依頼する委員７人以内で構成する。

（任　期）

第４　委員の任期は、３年とし、再任を妨げない。

（座長及び副座長）

第５　評価委員会に、座長及び副座長を置く。

２　座長及び副座長は、委員の互選により定める。

３　座長は、委員会を主宰し、会務を総理する。

４　副座長は、座長を補佐し、座長に事故があるときには、その職務を代理する。

（招　集）

第６　評価委員会は、館長が招集する。

２　館長は、必要に応じて、委員以外の関係者の出席を求めることができる。

（庶　務）

第７　評価委員会の庶務は、東京都写真美術館管理課において処理する。

（補　則）

第８　この要綱に定めるもののほか、評価委員会に必要な事項は、館長が定める。

附　則

この要綱は、平成１６年４月１日から施行する。

東京都写真美術館外部評価委員会委員名簿

	氏　名	職　業・役　職	備　　考
座　長	柏木　　博	武蔵野美術大学名誉教授	美術館・博物館 経営研究者
副座長	小勝　禮子	近現代美術史・美術批評 前栃木県立美術館学芸課長	美術館・博物館 経営研究者
	杉田　　敦	女子美術大学芸術学部教授	美術館・博物館 経営研究者
	倉石　信乃	明治大学大学院理工学研究科教授	美術館・博物館 経営研究者
	片岡　英子	ニューズウィーク日本版副編集長 フォト･ディレクター	マスコミ関係者
	服部　一人		写真美術館ボランティア

（敬称略：順不同）